

体 育 科

1 体育科でねらうもの

学習指導要領の目標

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
- (2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。
- (3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

この目標は、(1)～(3)の目標が相互に密接な関連をもちつつ、体育科の究極的な目標である、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指すことを示している。

ここでいう資質・能力とは、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を指している。

(1)の「知識及び技能」は、個別の事実的な知識のみを指すものではなく、それらが相互に関連付けられ、更に社会の中で生きて働く知識となるものを含むとされている。体育においては、この趣旨を踏まえ、運動の楽しさや喜びを味わったり、身近な生活で健康の保持増進をしたりするための基礎的・基本的な「知識及び技能」を踏まえて設定されている。

(2)の「思考力、判断力、表現力等」は、情報を捉えて多角的に精査したり、課題を見いだし他者と協働しながら解決したり、自分の考えを形成し伝え合ったり、思いや考えを基に創造したりするために必要な資質・能力である。そのため、新たな情報と既存の知識を活用しながら課題を解決したり、自己の考えを形成したり、新たな価値を創造したりするために必要な情報を選択し、思考していくことが必要になる。また、伝える相手や状況に応じた表現力を培うことが求められる。

(3)の「学びに向かう力、人間性等」は、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考の過程等を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの（学びに向かう力）と、多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど（人間性等）から構成されている。

2 指導要領改訂の趣旨及び要点

(1) 改訂の趣旨

運動やスポーツとの多様な関わり方ができるようにする観点から、運動やスポーツについての興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、資質・能力の三つの柱をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図ることが大切であるとしている。

(2) 改訂の要点

① 内容及び内容の取扱いの改善

ア 「体育の見方・考え方」を働かせて、三つの資質・能力を育成する。

体育や保健の見方・考え方とは、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」である。

- イ 小学校から高等学校まで12年間を見通して、学習したことを実生活や実社会に生かし、運動の習慣化につなげ、豊かなスポーツライフを継続することができるようにする。
- 小1～小4：「各種の運動の基礎を培う時期」
- 小5～中2：「多くの領域の学習を経験する時期」
- 中3～高3：「卒業後も運動やスポーツに多様に関わることができるようにする時期」
- ウ 体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、共生の視点を踏まえて指導内容を示している。
- エ 低学年については、新たに領域名を「体づくりの運動遊び」とし、内容を「体ほぐしの運動遊び」及び「多様な動きをつくる運動遊び」で構成している。
- オ 「走・跳の運動（遊び）」及び「陸上運動」については、児童の実態に応じて投の運動（遊び）を加えて指導することができることを新たに「内容の取扱い」に示した。
- カ 中学年の「ゴール型ゲーム」については、味方チームと相手チームが入り交じって得点を取り合うゲーム及び陣地を取り合うゲームを取り扱うものとすることを、新たに「内容の取扱い」に示した。また、高学年のボール運動において、これまで示された内容に替えてハンドボール、ラグビー、フットボールなど型に応じたその他のボール運動を指導することもできることを、新たに「内容の取扱い」に示した。
- キ オリンピック・パラリンピックに関する指導については、各運動領域の内容との関連を図り、ルールやマナーを遵守することやフェアなプレイを大切にすることなど、運動を通してスポーツの意義や価値等に触れることができるようにすることを、新たに「指導計画の作成と内容の取扱い」に示した。

学年	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
授業時間	1 0 2	1 0 5	1 0 5	1 0 5	9 0	9 0
領域	体づくりの運動遊び		体づくり運動			
	器械・器具を使つての運動遊び		器械運動			
	走・跳の運動遊び		走・跳の運動		陸上運動	
	水遊び		水泳運動			
	ゲーム				ボール運動	
	表現リズム遊び		表現運動			
			保健			

3 特別の教科道徳との関連

体育科と道徳教育との関連を明確に意識しながら、適切な指導を行う必要がある。

自己の課題の解決に向けて運動をしたり、集団で楽しくゲームを行ったりすることを通して、最後まで粘り強く取り組む、気持ちのよい挨拶をする、仲間と協力する、勝敗を受け入れる、フェアなプレイを大切にすること、仲間の考えや取組を理解するなどの態度を養う。

4 体育科における言語活動

筋道を立てて練習や作戦について話し合うことや、身近な健康の保持増進について話し合うことなど、コミュニケーション能力や論理的な思考力の育成を促すための言語活動を積極的に行うことに留意することは大切である。

運動領域の指導に当たっては、資質・能力の三つの柱についての指導を効果的に行うために、必要に応じてグループでの話し合い等を促すなど、体を動かす機会を適切に確保した上で言語活動の充実を図ることに留意することを示している。言語活動の量を求めて運動量が減ってしまうようなことにならないよう、その質的向上を目指していきたい。